特集2

“登板”本学の社会人学生

――人生の第2ステージに弾みを――

OL 転職時の悔しさがバネに

主婦 「通教」で学びの楽しさ知る

学生 「自力」つけるため2度目の大学

中央大学には、多くの社会人学生が一般学生とともに学んでいる。
社会人でありながら、大学で学ぶ。その動機はさまざまだろう。
取材した3人の社会人学生もきっかけは三者三様だ。だが、大学で学び、人生を変えたい。
この思いは共通だった。もうひとつ3人には共通するものがあった。
それは、抜群の「行動力」と旺盛な「向学心」だ。

社会人学生＋OL

秋元真由子さん

大学に入るか、ピアノを習うか 不快に感じた転職時の〝採用条件〟

「大学に入るか、ピアノを習うか、どっちかでした」

大学編入を考えたきっかけを聞いたら、まったく予想外の答えが返ってきた。そのひとことから、秋元真由子さんはカラッとした行動力のある人だとお見受けしてしまった。

秋元さんは短大を卒業した後、9年ほど社会に出て働いた。3回の転職を経験したが、その度に不快に思ったことがあった。それは採用の条件としてあげられていた『大学卒業』という〝資格〟に対してである。

「大学卒業がなんぼのものなの？」

「大学卒業だったら私を採用するの？」

「短大卒だけど私の方が仕事はできる！」

編入試験要綱を懐かしげに見入る

部に3年から編入することにした。

会社では経理の仕事をしている秋元さんは、仕事が終わったら飲みに行く、という日々を送っていたという。「暇だったから」というが、大学への入学を決めたのは、転職の際の採用条件に対する思いが強かったからだ。

中央大学に入学を決めた一番の理由は、「遅くまで授業(7限)があるから」だった。しかし、働きながら大学に通うということはそう簡単なことではない。時間の使い方が大変重要になってくる。そこで大学への入学を決めると同時に考えたのが、「フレックスタイム制でした」。

フレックスタイム制とは、1日8時間、1週間で40時間を超えない範囲内で、始業時間と終業時間が労働者に委ねられる制度のことである。

「思い立ったら吉日」という秋元さん。会社に大学行くためにフレックスタイム制を使いたい旨を説明しに行った。

「フレックスタイム制を使いたいんですけど…」

「前例がないので、できません」

きっぱりと断られてしまった。だが、ここで諦める秋元さんではなかった。なんと会社の役員に直接交渉をして、フレックスタイム制の使用を認めてもらったのだ。

すごい度胸と意思の強さが感じられる行動である。もし認められなかったとしても「ダメならダメで考えよう。アルバイトしながらでも何でも大学に通おう」と考えていたという。

会社と山梨県を往復してゼミ合宿参加 〝二足のわらじ〟は行動力でカバー

面接と小論文という試験を経て、商学部3年編入に見事合格。大学生活が始まった。授業を受けるのに早速、会社に了解を得たフレックスタイム制を生かした。

3年生のゼミが木曜の4限(午後3時から)にあった。これに出席するため、月曜から水曜は決められた始業時間の1時間前の朝7時に出勤し、夕方5時まで働き、木曜は月〜水曜までで確保した3時間を使って早く退社をした。これで4限のゼミに出席することができた。

秋元さんの憤怒ともいえる思いは、いまをどうにかしたい、という新たな行動への模索につながっていった。それが冒頭の答えである。「大学に行こう! ダメだったらピアノ教室に行こう!」というのは、傍目には違った選択にみえるが、秋元さんにとっては「今まで一度も習い事をしたことがなかったから、何か習いごとをしてみたい」ということで一致していた。

遅くまで授業がある中大選ぶ 勤務はフレックスタイム制で

選んだのは「大学」。社会人入試で中央大学商学

転職したときの苦い思いが大学へ

こうしたやり方で大学に行く時間をつくり、働きながら2年間の学生生活をクリアしたのである。

大学生活で一番楽しかった授業は、「ゼミだった」という。だが、ゼミ合宿が行われた時、どうしても仕事があって全日で参加できなかった。そこで秋元さんは、昼間会社に行き、その日の夜、車で合宿の行われている山梨県まで行き、そして次の日の朝早くに東京に帰ってきて仕事に行き、またその日の夜に山梨県へ行く。という何ともアグレッシブな行動をとったのだ。

こういった思い切った行動力が、仕事をフルにしながら大学に通うということを成し遂げられた一番の理由なのではないかと感じた。

一番得たのは、人との出会い「失敗しても後悔しない」

キャンパスでは現役大学生と同じ目線で学生生活を送った。周りの学生とも年齢の差を意識することなく友達になった。最近の若い子は考え方がしっかりしていると感じ、影響もされたり刺激されたりもしたという。

「若い子のメールや言葉遣いに新鮮さを感じたり、授業中にメールで呼び出されて学食でワイワイおしゃべりしたり…。本当に楽しかった。私は自称18歳ですから」と、秋元さんは、お茶目に、明るく笑った。

「授業では、社会人としてやってきたことが役立って、理解や知識の定着の度合いは全然違った。以前より自分のやっている仕事を多角的にとらえられるようにもなった」。実務経験のある社会人学生だからこそで、普通の学生では絶対に感じることはできないだろう。

「大学に入って一番よかったことは何です

笑顔と行動力が持ち味の秋元さん

か？」と聞いたら、「人と出会えたことが宝物」と即座に答えが返った。

「人との出会いが本当に一番の得たもの。今でも出会った学生達とつながりがあるし、大学に来なければ絶対に会うことがなかった人と知り合えたのは本当に良かった。仕事があって授業に出られないときは、友達がプリントをもらってくれたり、いろんな情報をくれた。おかげで働きながらでも2年で卒業することができました」

人との出会いとともに、秋元さん自身が強い意志と行動力の持ち主だからこそ、なし得たのだと改めて感じた。

「完結するまで辞めたくない！」

「失敗しても後悔しない。過去は過去」

秋元さんの〝信条〟でもある。

私たちはいろいろなことに無限に挑戦できるはずだし、チャンスはいくらでもあると思うが、なかなか踏み切れない。失敗するのも怖いし、行動力もない。でも挑戦しなければ何事もはじまらない。それで失敗したとしても、それを糧として割り切って考えていくことで、また新しいことに挑戦していける。そんなことを行動力と思いっきりのある秋元さんから学んだ。

（学生記者　宮下沙希＝文学部2年）

因習が大学進学阻む 義母の後押しで通教へ

「大学に入って人生が変わりました。これから、別の未来があるのではないか、と思うようになりました」

結婚し、主婦業に仕事にと忙しい生活を送っているさなか、学びの場を求め、通信教育で中央大学に入学、卒後は中央大学大学院法学研究科（以下、法学研究科）に進学した宮崎久実さん（45）は目を輝かせてそう話した。

高校を卒業し、あたりまえのように大学に進学した私たち一般学生のうち、「大学に入って人生が変わった」と断言できる人は果たしてどのくらいいるだろうか。一念発起して勉学の道に入った社会人ならではの気概にのっけから圧倒された。

新潟出身の宮崎さんは高校生の時、大学へ行くつもりだった。しかし、まだ残っている「女に教育は必要ない」という古い考えに阻まれ希望は通らなかった。結婚してから、そんな考えに自分は縛り付けられていたのか、と悟り呆然とした。学ぶ機会を奪われていた、と感じた。大学へ行けたらなあ、という願望は消えることはなかった。

そんなあるとき、義母の一言が強い後押しとなった。

「勉強しに（大学へ）行っておいで」

今まで持っていた悔しさがふつふつと煮え立つような感情が、パンとはじけた。

主婦業に仕事、そして通教 1日2時間、机に向かう

30代前半に、中央大学法学部通信教育課程（以下、中大通教）へ入学。中大通教の存在は、中大出身の夫が教えてくれた。

「物事の色々な基本は法律。たとえば車に関しても、道路交通法というものがあります。それを知らなくても道を歩けるけど、何か起こったときには法律がベースになる」。法律を勉強することにしたのは、仕事上、法律を知らないことで大変な思いをする人たちを見て、自分が力を付けなきゃと思ったからであった。

先生から直接学べる授業は、何よりの楽しみ

主婦業・仕事・中大通教の勉強の「3本立て」というハードな新潟での生活がはじまった。わかってはいたが、やはり「3本立て」は大変だった。眠ってもいいから、とにかく1日に1～2時間は机に向かうと心に決めた。「何かを犠牲にしなければ、時間は生まれない」との強い気持ちがあった。

土日曜は貴重だった。平日分を埋めるように勉強に専念した。「遊びの時間を勉強に回しました。少しくらい遊ぶことも必要だったかも、と今は反省します」と苦笑いする。

そんな折、中大通教から法学研究科へ進んだ社会人女性を知った。できたら自分もという思いが膨らんでいった。次第に、法学研究科への進学を目標とするようになった。そのためには試験で良い成績を取る必要があった。さらに勉強に励むようになった。

夏休みのスクーリングに感動 教授の生の講義に涙する学生

中大通教では、夏休みに1週間に及ぶスクーリング、金曜から日曜にかけて3日間の校舎外スクーリングがある。夏休みの1週間に集中して、通常では半年分となる12コマの講義が行われる。

教授の講義が生で聴けるスクーリングに、全国から多摩キャンパスに集まった通教生は目の色を変える。「朝8時開門と同時に、学生は講義が行われる校舎まで全力で走り、なるべく前の席を確保する。講義を聴いて、感動のあまり涙する学生が珍しくないんですよ」という。休憩時間には疑問を解決したい多くの学生が、教授をぐるりと囲む。

「普通の大学生はこれを聞くと『えっ』と驚くでしょう。でも本当です。教授に会って質問出来るなんて、私たちには滅多にないことですから」

宮崎さんにとって、新潟での中大通教支部活動と月1度の学習会も重要な位置を占めていた。当時、新潟には地方スクーリングがなかった。支部長として、その誘致活動に奔走した。「みんなから、感謝されたり評価されたりと、プラスの反応が返ってくることが嬉しかった」と振り返る。

中大通教の存在やシステムを知ってもらい、大

石原八束の句碑前で。最近は俳句にこっている

学で学ぶきっかけになればと、テレビニュースなどに取り上げてもらった。また同じ通教生で、論文の書き方が分からず困っている人のために弁護士を講師にお願いして学習会を始めるなど、みんなで支え合う体制をつくり上げた。

周りの理解と支援が必要 7年半で通教を卒業

「横のつながりをつくることは、勉強を続けていくためには必要でした。周りの理解と支援があったから続けられたんです」。仕事で知り合った年上の女性は心から応援してくれた。向学心を犠牲にして、早くから働き始めたこの女性は、宮崎さんのことを「自分の分まで学んでほしい」と温かく見つめてくれていた。

7年半で中大通教を卒業することができた。中大通教を4年で卒業するのは3％で、途中で挫折する人が9割であるという。卒論テーマは、悩み抜いた末に決めた「NGOの地位と機能」だった。

「先生も先輩も中大通教事務室も通教生を本当に大切に考えてくれました。また学習会などで他の学生と関わっていく中でいい刺激を受けたことも、7年半という長い間、続けられた理由のひとつだと思います」

中大通教卒業時に「成績優秀者」と「支部活動功労賞」の表彰を受けた。努力した甲斐があった。

宮崎さんの向学心は、中大通教を卒業しても止まなかった。目指していた法学研究科に進学したのだ。中大通教で知った教授たちの熱意のこもった講義を聴いて、さらに深く学んでみたい、との思いを募らせたからだった。

通教の職員とは顔なじみ

「キャンパスライフに憧れていました。大学生になってみたかったのです」とも語る。

東京に転居して大学院進学 来年の春、卒業へ

法学研究科は中大通教と異なり、多摩キャンパスに通うため、新潟から東京に単身転居した。2年間で34単位が修士号を取得するのに必要で、週に何回か通学した。夫・家族の理解がなければ、新潟から上京し、東京での単身生活は成り立たなかった。

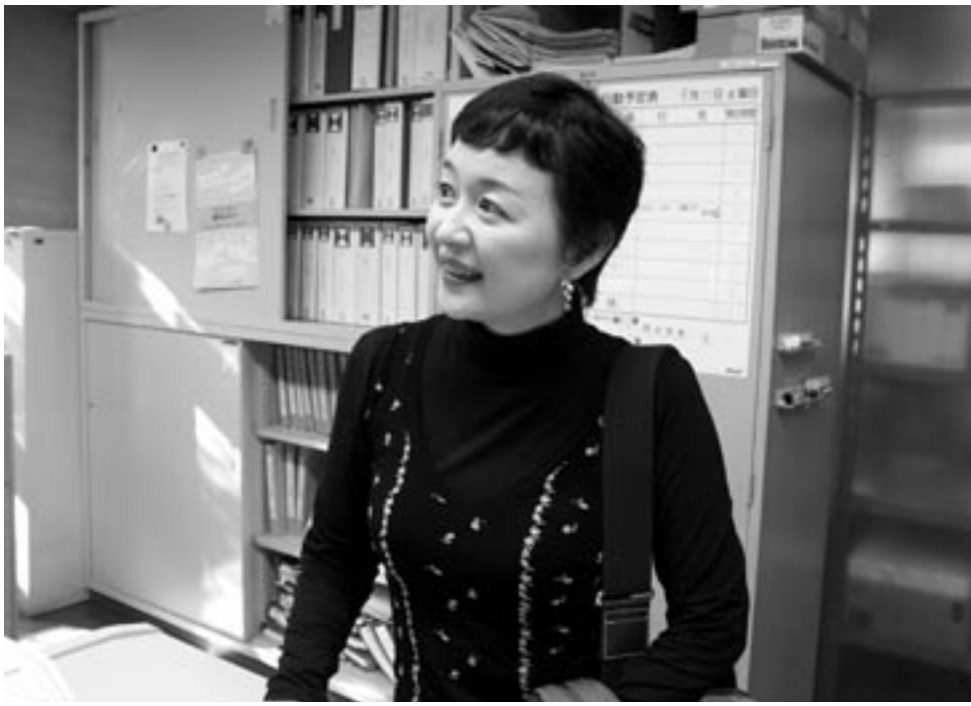
大学院生は今年を含めて6年。1、2年目は東京で過ごし、3年目は休学し、石川県でNPO法人の事務局長として精力的に活動。学問に励みながら、その学習経験を活かして、実践的な活動を展開してきた。そして4、5年目は新潟で過ごし、6年目となる今年、また東京へ戻ってきた。

宮崎さんが挑戦し続ける心意気の源泉は何なのだろうか――。

「中大通教を通じて出会った方々から、善い影響を受けました。チャレンジすれば可能性が広がるということを実感しました。よく友人から『挑戦する人』だと言われます。宣言したからには、頑張らなきゃと思うのです」

有言実行の人なのである。

来年の春、法学研究科を修了する予定だが、その後についてはいくつかの選択肢を前にして、現在模索中である。



いつも笑顔を絶やさない

生き直しの人生を実感 踏み出せ！はじめの一歩

「今は人生の選択肢をみつけて、生き直しているという感じ」

その選択肢ができたのも、中大通教に入学したことが原点になっている。最後にもっと勉強したいと思っている社会人にメッセージをお願いした。

「勉強したくても、はじめの一歩というのは、なかなか踏み出せないものです。気負うことなく、軽い気持ちで臨めばいい。人の手を借りてもいいし、できるところから始められればいい。何よりも中大通教の存在を知って欲しい。それが新しい人生のきっかけになればいいなあと思います」

（学生記者　池田園子＝法学部3年）

社会人学生＋学生

持原剛之さん

大学出て3年間、社会人を経験 心境の変化？で二度目の大学

持原剛之さんは現在、中央大学商学部商業貿易学科4年生で、27歳。一見して、一般の学生と何ら変わらない。しかし、一度、大学を卒業しており、二度大学に入ったというちょっと変わった経歴の持ち主なのである。

持原さんは四年制大学を卒業後、ごく自然に部品メーカーに就職した。

そこで3年間勤務し、昨年四月に社会人試験で中央大学商学部3年に編入した。いまは、バリバリの現役大学生だ。

社会人としての3年間に何か心境の変化あったのではないかと想像はつくが、またなぜ大学で学ぼうと考えたのか、興味が湧く。きっかけを訊ねてみた。

自分の「力」のなさ痛感
「後悔ないようにしたい」

「仕事で企画書をつくることがしばしばあったんですが、その度に自分の文章力、構成力のなさを実感しました。このまま会社にいて、もし倒産でもしたら自分の力では転職することができない。今の会社に依存していたら自分の能力は伸びない。そんな気持ちがふくらんできた」

自分には「力」が足りない。このままでいいのか？　そんな思いが強くなっていたとき、持原さんの父親の病気が突然、発覚した。自分もいつ同じようになるかわからない。後悔の無いようにしようと自らに「力」をつけるため大学に編入することを決心した。

高校を卒業して、なんとなく大学に進学したときと、今回は明らかに違いがあった。大学に入る動機を明確に自覚したからだ。今度こそ「しっかり勉強する」の一念だった。

商学部の掲示板前で

あえて一番厳しいゼミ選ぶ
論文大会に出場、文章力養う

ゼミは、再び社会に出たときに役に立つと考え、ビジネス理論を学ぶため、経営戦略中心の砂川和範准教授のゼミに入った。

「商学部で指導が熱心でハードであると言われるゼミをあえて選びました。社会人で大学に入ったんだから、という思いもありました」という。

ゼミでは、ＩＳＥＪ（日本政策学生会議）という日本全国の学生が集まる大規模な論文大会に出場するなど、能動的に活動し、文章力を養うように努めた。「ゼミが一番楽しかった」という。

「商学部の授業は本当に興味深いと感じましたね。社会人としての経験が、授業を理解するのにすごく役立ちました。実際の経験と教わる理論がリンクして、頭に入っていくんですね」

社会経験がない大半の学生ならテスト前に勉強して、あとは忘れてしまったり、授業の内容を聞き流してしまったりすることもしばしばあるが、就業経験がある持原さんの場合は違っていたのだ。

高い向学心が、授業の理解を深めるのを手伝ったのは、言うまでもないだろう。

「苦労するのは語学。講義を受ける前に原文を覚えるのが大変です」と、持原さんは四隅がぼろぼろになった紙を取り出してみせた。

二度目の就活はスムーズに
積極的に自ら足を運ぶ

卒業論文は教授に積極的に聞きに行き、論文を執筆した。「他の学生達はあまり先生に聞きに行かないんです。もったいないと思った」という。

自ら動かなければ、何もはじまらず、何事も成就しないということなのだろう。また教授と関わることで、上に立つ人には国語力があると感じ、文章を書く力の大切さを改めて実感したそうだ。

就職活動は、二度目ということで緊張やとまどいもなく、スムーズにスタートした。企業訪問はとにかく積極的に行った。

「学生の立場をフルに活用しました。相手が社会人だと企業はノウハウを盗まれたくないために多くは教えてくれない。しかし、学生の立場で勉強熱心なことをアピールすれば受け容れてくれて、いろいろなことを教えてくれるんです」

だから「学生は最高」だと、持原さんは言う。自ら足を運んで活動した結果、最終的に希望していた金融機関に決まった。

若く、さわやか。

忙しい人に向いた中大 フレックス制で授業を有効に

最後に中央大学のよいところを聞いてみた。

「中央大学はフレックス制で1限から7限の授業を有効に使うことが出来るため、仕事やアルバイトなどで忙しい人に向いている。特に商学部は、企業に関連した実践的な学問が多いので社会人学生にはおすすめです」

持原さんの話から、学生時代の「学び」の大切さを実感した。同時に「学ぶ」姿勢、「学び方」を知ることができた気がした。

（学生記者　池田理沙＝文学部2年）

二度目の大学生は向学心旺盛
来春からは新たな仕事がはじまる